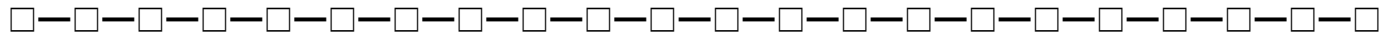


2016 年度第 2 回関東地区研究会
ミルトン・ベネット博士による一日研修会

「コンテキスト意識を育成する：構成主義パラダイムによる異文化コミュニケーション能力へのアプローチ」に参加して

報告者：八島智子（関西大学）



「異文化感受性発達モデル」(DMIS: Developmental Model of Intercultural Sensitivity) の提唱者として名高いミルトン・ベネット博士の12年ぶりの日本での研修会があると聞いて心を躍らせたのは私だけではないであろう。以前定期的に行われていたベネットセミナーの常連であった私にとって、今回のセミナーも心地よい興奮の連続であった。50人を越える参加者で部屋は熱気に包まれた。テンポが早く、よく整理され、しかも凝縮した内容、人を引き込む話術は変わらず健在だ。多くの示唆があったが、特に心に残った点をいくつかまとめてみたい。(筆者の理解を越える部分もあったので、内容の偏りや解釈の間違いがあればご容赦いただきたい。)

■ コンテキスト意識

人は異文化接触の結果、文化差をより強く意識するようになるということが、ホフステッドの研究で明らかにされている。そうするとグローバル化する世界の課題は、接触すればするほど差異を感じやすくなる隣人と、いかに共存をしていけるかということになる。そのために必要な異文化間能力を養うために必要となるのが、今回のセミナーのキーワードとも言える、コンテキスト意識(contextual consciousness)である。これは、自らがどのような(個人的・文化的・組織的)コンテキストにいるのかを鋭敏に認識できることと、自分のコンテキストから、他の(個人的・文化的・組織的)コンテキストに視点をシフトするための自己内省能力をさす。ここでいう意識とは、Julian Jaynes に依拠しており、人類の歴史のなかで比較的新しいものであるという。古代の人間には私(I)という意識はなく、聞こえてくる声(神の声)に従うだけの存在であった。しかし今でも、人間はストレスが高まると意識が漂流し、古い無意識の状態に戻ってしまう。聞こえてくる声に、権威の声に盲従してしまう危険性は常にある。

他者を自己と同じ意識を持った存在と捉え、他者の視点で自分を捉えること(Me)が、他者・他グループと共存する第一歩だとすれば、多文化共存の環境を創るためには、私たちひとりひとりの意識(コンテキスト意識)の発達が必要ということであろう。

■ 「構築主義的パラダイムへ

パラダイムの歴史的変遷を、有史前から啓蒙主義へ、さらには ニュートンの不変主義からアインシュタインの相対主義、そして量子力学に基づく構成主義パラダイムへと辿った。普遍主義では、「事実」は客観的に観察できるものとして存在する。相対主義では、自らの視点によって「事実」は見え方が違うと考える。構成主義では、「事実」の真偽はコンテキストによって決まると考える。構成主義では、リアリティを、自分と他者や環境との相互作用のなかで創られていくと考え、文化を、aprioriにあるものとして捉えるのではなく、集団でリアリティを構築していくプロセスであり、その産物と捉える。異文化理解の基礎として、我々に馴染みのある相対主義的パラダイムでは、様々な視点を相対化するが、それだけでは現在の世界が抱える問題を解決でき

ない。その弱点を克服するためには構成主義的なアプローチと、新たな意識の段階に到達することが必要となる。構成主義では、人間の「意図と期待」が、物事の起こる蓋然性に影響すると考える。それならば、より良い環境を作るためには、わたしたち一人ひとりが良質で、一貫性のある、「意図や期待」を持つ必要があるということになる。

■ 構成主義的にみた異文化間能力の発達

構成主義は確かに新たな意識の段階に到達することを前提とするが、これまで日本の異文化コミュニケーション研究者やトレーナーに馴染みのある「異文化感受性発達モデル」や、DIE、エスノセントリズムを克服するためのトレーニングは、そもそも構成主義的なアプローチと言えるので、全く新しいことをしないとイケないわけではない。むしろ、これらが構成主義的であることを再認識し、自らの実践に新たな光を当ててみることで、そしてそこに彼が避けるべきという、パラダイムの混同や混乱はないかチェックしてみることで、つまり構築主義的な教育・研究・実践のなかで一固定的・本質主義的な文化の特徴を提示したり、単純な因果関係を求めたり、すぐ活用できるノウハウを提示するのではなく一意識の発達を促すことができているかをチェックすること。それによって、構成主義的に一貫性のある洗練された実践に至ることができるであろう。

「異文化感受性発達モデル」において、エスノセントリックからエスノレラティブな段階に移行するための鍵として挙げられたのは、次の3点である。

1. 統一性と多様性の折り合いをどうつけるか。つまり多様性を尊重しながら、統一性を実現するにはどうすればよいかを考えること。
2. 一方が他方に同化するのではなく、相互適応(co-adaption)を通して第3の文化を作り出すこと。
3. 相対主義を実践しつつ、倫理的なコミットメントをすることである。これは、複数の正当なオプションを考慮し、その選択に真摯にコミットすることを意味する。

個人的には、特に最後の倫理性という点が心に強く響いた。責任をもった選択、それは誰かの声に盲従するよりはるかに難しく、エネルギーも必要だ。相対主義に依拠し、文化の違いに寛容になり柔軟になることを学び、それを教えてきた私たちは、さらに新たな一歩を踏み出す必要がある。我々が生きている現実私たちの集団的な選択の結果であるので、そのプロセスに自覚的になり責任を持たなければならないということであろう。つまり、エイジェンシーを行使するための「意識」を発達させなければならないということなのだろう。

以上、学びの多い、充実した一日であった。これを機に、新たなミルトン・ベネット・セミナーシリーズが始まることを期待したい。